

愛犬飼育のノーハウいろいろ

(NO. 2) 荻野愛犬病院獣医師 荻野野 目光

「パルボウイルス感染症」

昔から可愛い小犬の命を無惨に奪ってきたジステンパー症に代わって忽然と登場してきたのが、この凶悪無惨で血も涙もないようなこの病気です。一九七八年にアメリカ南部を中心に突然発生したこの病気は、あっという間に全世界に広がりました。

発生の順序などは全く判っておりません。

研究の結果の一つに、猫の昔からの病気で、猫汎白血球減少症（猫ジステンパー症）のウイルスと、このパルボウイルスとが非常に酷似していることが判ってきました。

このパルボと言う単語の意味は、最小のという意味です。

つまり、猫だけの病気だったこの感染症の病原が、ある機会を得て犬に感染して、徐々に変化順応して犬の体内で成育繁殖できるウイルスに変化したのではないかと言うのです。今のと

ころこの説が有力で、一般に支持されています。

人のエイズウイルスなどのように、新しい悪病の誕生と言うわけです。

日本には、一九七八年に上陸し、私の見聞では埼玉県南部、東京都全域、神奈川県都市部、北九州一帯にわたって突発し瞬く間に蔓延、その病状の激しさと、今までに無かった症状だったために、ひよっとしたら誰かに毒餌を食べさせられたのではないかと疑った飼い主も多く、新聞紙上にも週刊誌などにも報道されて大騒ぎになりました。

この病気はミンク、アナグマ、アライグマ、いたち、狐、狼などにも感染し、各動物園などでも動物達が次々と感染し、弊死してゆきました。

当時はわれわれも治療法など全く分からず、対症療法を懸命に行うしかありませんでした。一九八〇年に病犬が東大付属病

院に持ち込まれ、同大では以前から情報を得ていた犬バルボ腸炎ではないかと研究を開始し、間もなくバルボウイルスの分離に成功し、病名が確定しました。

【亡征状】

バルボ腸炎は普通二〜三日の潜伏期間を経て、突然激しい嘔吐から発症します。この嘔吐は一日十回から二十回の激しさで継続します。

この時期一時的に中熱（三十九〜四十度）が出ることもあるが、全く平熱であることも多い。この頃同時に下痢が始まります。最初は白っぽい水様便を排泄し、その後徐々に灰色便〜溝泥様の便となり血液が混ざってきます。

このような症状があつて、飼い主は初めて異常に気がつき、獣医科を訪ねます。

早期治療が開始されても抗生物質などの薬は殆ど効果がありません。わずかにリンゲルなどを中心とした大量輸液治療法と現れた症状に対する対症療法が、効を奏することがあります。

前述の東大獣医学教室での例では、九頭中六頭は死亡した

が、三頭は治療に成功して回復した。結局死亡率は約七十割になり、その後流行が本格化して多数の病犬が上診されるようになっても、成犬の致死率はこの前後であると思われます。これが幼犬の場合は、殆ど一〇〇割が死亡します。死亡までの日数は、その日のうちであつたり、長くても四〜五日です。

病犬は嘔吐を繰り返し、殆ど血液に見える水瀉便はひっきりなしとなり、この頃になると犬は脱水と乏血のために、ぐったりとしてただ呻吟するのみとなり、水は与えれば飲むのですが瞬く間に戻してしまいます。この場合、かえつて体液の喪失につながり、胃液を吐出した場合カリウムイオン、水素イオン、塩素イオンなどの重要な無機質、電解質を喪失してゆきます。

ここまで症状が進むと高度の脱水症状となり、皮膚を摘み挙げても持ち上がったまま元に戻らないようになってしまいます。もはやここまでくると死を待つしかありません。

何故このような激しい症状がでるのでしょうか？ 解剖所見によりますと胃の粘膜と、腸は空腸と回腸に著しい炎症が見られます。一般の腸炎、例えば細菌性の下痢などですと腸の絨毛

部だけの炎症で下痢が発生しますが、バルボ腸炎の場合はおつと傷が深く、絨毛の生えている根本の部分の陰窩と呼ばれる部分をも侵襲して全く再生不能の糜爛状態にしてしまいます。同時に周囲の組織の鬱血、浮腫を生じリンパ腺も腫張しています。このような病状は飲み込んだ水を全く吸収することができず、また、炎症のために分泌が亢進されるため下痢となる内容をつくります。同時に下血、粘膜便の排泄のために体液の喪失は激しくなつてゆきます。

「凶伯治療」

発病が疑われる場合にはできるだけ早く輸液を開始します。輸液はラクトリンゲルなどを主体として、症状によつての薬剤を補つて注入してゆきます。抗生物質などは殆ど効果は期待できません。ただ、二次感染を押さえるために使用は必要です。そのほかシヨックを防ぐための副腎皮質ステロイド剤、下痢症状の改善のための活性炭吸着剤、乳酸菌製剤などを使用して体力の維持をはかります。

あとは犬自身の抵抗力と自己免疫の発現を待つばかりです。

輸液の量は体重の五く十五割（1kg/五く一五〇ミリ）の相当多量と思われる量が必要です。これは血流量の回復、喪失した電解質の補完、嘔吐感の抑制などに不可欠の治療です。

この結果運良く助かった犬も、これが幼犬であつた場合には、数ヶ月たつてから突然に心不全で死亡することがあります。これはバルボ腸炎の後遺症で罹患時期に心筋炎を併発して、以後の心筋の発育が阻害されているため、だんだんと身体が発育して血流量が増加してくるに従つて心機能が対応できずに心不全を起こすことになります。

こうして考えてみると、最高の治療は言うまでもなくワクチンを早く接種しておくことに尽きるようです。

生後五〇日となつたらいち早く三種混合ワクチンく七種混合ワクチンの接種を受けましょう。生後六く七週間でワクチン（種）を行わなければなりません。これによつて初めて強力な抗病力が完成します。これで初めて戸外で遊ばせる、軽い散歩や運動をさせてもよいことになります。

そして、三ヶ月後に再ブースターを行います。これで殆ど完全な予防接種が完成したことになります。

ただし、予防接種をする前には腸内寄生虫の駆除を完全にやっておきませんと効果が不完全になりますので、気をつけねばなりません。バルボ腸炎は免疫期間が比較的短く六ヶ月から長くても一年と言われておりますので、翌年から一年に一回の予防接種をしておく安全です。

「感染源に対する知識」

この病気は、感染した後でどうして、どこでうつったのだろうといくら考えても分からないというのが普通です。病犬の排泄した便のたった一疋中に約一〇億個のウイルスが含まれていて、他の犬に感染するには一〇〇〇個あれば充分だと言われております。ですから病犬の糞便が一疋あれば一〇〇万頭の犬を感染させることができるということになります。いかに強力な伝染力を持っているかがお分かりになると思います。そして動物の体外に排泄されてからも極めて長期間の感染力を持ち続けます。ごく普通の環境で少なくとも六ヶ月と言われています。地

上にあつて散らばつて乾燥したウイルスが、一面に広がつて埃や泥と混じつて常在している場所を人が歩いて家に帰り、自ら愛犬にうつしてしまつたり、また、そこが犬の散歩のコースになつている場合は、確実に感染の危険があるわけです。

昔から犬は多頭飼育することや、長時間の集合状態に置くことは衛生管理上危険だと言われています。つまり、犬が複数集まれば病気が発生するということです。いろいろの伝染病、特に今まで申し上げてきたバルボ腸炎など、年齢に関係なく伝染する病気は、まだ一般に免疫が行き渡っていないために、最も警戒すべき病気というべきでしょう。

「消毒剤の用法」

汚染された場所の消毒は、ウイルス症全般にいえることです。が、確実な効果を現す消毒薬がないということです。一般に使用される逆性石鹼液やクレゾール石鹼液などは全く効果ありません。実験上効果があつたと認められたものは、三〇倍次亜塩素酸ソーダ液、四割ホルマリン溶液、一割過酸化水素液などが有効とされています。

ただし、出先や家庭で手元にこれらの薬品がない場合は、石鹼で丹念に手指を洗うことで、汚染は極めて少なくなります。

次亜塩素酸ソーダは、ご承知の通り三〇倍に薄めてもぬるとして悪臭もあり、手を洗うと皮膚もあれますから実用には適しません。このため畜産家、獣医師など向けに改良されたクレンテ（エーザイ発売）という薬剤などが出ており、これは比較的使い易く、塩素剤の欠点は軽減されています。クレンテは塩素を改良した消毒剤で、ジクロロイソシアヌル酸ナトリウムという主成分一分子中に塩素は有効塩素として〇・六含有されています。

犬舎やその周囲、その付近の地面、その他小物類の漬け置きなどは、家庭用漂白剤を三〇倍に薄めた液を使用できますが、色物の布類とか手指の消毒、犬の身体の清拭などにはクレンテを二〇〇倍以上に薄めて使用されたほうがよいでしょう。

私の身近にこんな例がありました。ある親しい繁殖犬舎に、どこからともなく突然バルボ腸炎が発生しました。彼は朝夕の

犬舎の清掃を、神経質なくらい一所懸命に三〇倍漂白液を使用して消毒しました。液を撒くと刺激性の塩素ガスが発生します。ケージにも万遍なく噴霧します。私は或る日その現場を見て、激しすぎる位の警告をしました。毎日このように塩素ガスを吸い続けることは、健康上非常に危険なことだからです。彼はこの頃から「最近、指先から身体全体までがカルキ臭くつてしょうがない。鼻につくというか煙草を吸ってもカルキの味がする。」というようになりました。風邪を引いたのだから位に思っていたらしいのですが、さてこの咳が何時までたっても止まるどころか、だんだんとひどくなる一方です。普段、医者嫌いで通っている人なのですが、流石に病院で検査を受けました。結果は異常なしとのことでした。その後も咳は止まらず、次第に苦痛を訴えるようになってきました。二つ三つと病院をかえて診察を受けましたが、いずれも異常なしでただ呼吸器障害の内服薬を貰ってくるくらいの治療でした。症状の激しきにも係わらず、異常なしばかりなので、私の信頼している敏腕な外科医を紹介しました。ここでは肺にはつきりと陰影が見え

れました。ただ肺癆ようではなかったために少し様子を見ましようと言うことでした。この後も病状は改善されることなく、咳はひどくなる一方でした。これから約一ヶ月して再検査で再びこの病院を訪れましたが、付き添いで行っていた私の家内がすぐ呼ばれて、重大な状態であることを言い渡されました。

直ちに入院、手術ということになりました。

なにせ見せて貰ったレントゲン映像には、肺が全く写っていないのです。完全に肺膿瘍の映像です。直ちに入院し、急遽肺臓切除が行われました。その後何回も入院を繰り返して、発病から二年後に遂に帰らぬ人となってしまいました。

発病の因果関係はいろいろあったかと思いますが、このバルボ腸炎の発生に伴う消毒作業での塩素ガスの吸引が決して無関係だったとは思われないうです。最初からもっと強く指導してあげればよかったのにと、今でも悔やまれて仕方ありません。

このような話を述べたのも、人も犬にも毎日を注意深く行動しなければならぬということを申し上げたかったのです。

このような副作用のない伝染病消毒薬で、ヨードホルム製剤は刺激性もなく悪臭もなく、効果も広範囲でウイルスにも消毒力を発揮します。ただ、ヨード色の濃い薬品ですから、手や布類などが染まってしまうのが欠点ですが、手や犬の身体に染まった色は時間が経てば抜けてきます。これは武田薬品製造発売で商品名クリンナップという消毒剤で、ヨウ素一・七五割、リン酸一〇割が主成分で目的により二〇〇倍〜八〇〇倍に希釈して使用します。通常手を洗ったり皮膚病の犬を洗う場合など、三〇〇倍ぐらいが適当で、色で判断すると日本蕎麦のかけ蕎麦のつゆの色ぐらいになります。

それではまた次号で。